

北山七重大塔の所在地について（上）

東 洋一

1. はじめに

本稿は、「西園寺四十五尺瀑布瀧と北山七重大塔（上）－金閣寺境内における所在について¹⁾」(以下〔第1部〕とする)に続く〔第2部〕である。約10年前に提出した〔第2部〕の原稿を紙数制限の都合により「上・下」に分割して発表する。また、本稿提出後に筆者が論じた「北山大塔基壇推定地」を当研究所が断割調査を実施したので、この調査の問題点を次号の『研究紀要』執筆予定の(下)で改めて論じることとする。筆者は断割調査の断面に平坦な上面に赤色に固まった厚い被熱層(叩き締めてあった可能性がある)の広がりや人工による堅い整地層の積み上げが厚さ2m以上あることを実見して確認したので、本稿の結論には些かの変更もないことをここに認めておく。読者は断割調査の報告書²⁾と読み比べられるよう切望する。

筆者が〔第1部〕を発表してから15年以上経過した。〔第1部〕では北山大塔の所在地を簡単な説明と位置を図示したに留まっていた。しかし、西園寺四十五尺瀑布瀧については、現北山石不動堂石室内部を後に調査された鈴木久男氏が、石室に使用されていた石材に康永元年(1342)から文和二年(1353)までの西園寺時代に遡る年号を刻み込んでいることを発見された³⁾。このことにより筆者が依拠した『増鏡』の「たきのもとに不動尊」という記述と符合する可能性が高まり、相国寺官長有馬頼底氏も石不動堂際の崖を「西園寺四十五尺瀑布瀧」であるとされた⁴⁾。

さて、「北山七重大塔」について詳論する本論は、研究所の諸事情から一度は却下された論文である。常識からして塔跡基壇が巨大すぎたからである。ところが2016年に三枝暁子氏や早島大祐氏が〔第1部〕における筆者の見解を正当に紹介された⁵⁾。奇しくも筆者が担当した金閣寺駐車場調査(図1)で、筆者の推定した大塔所在地西約20m地点から、推定径2.3mもの巨大な青銅製九輪破片(8.2kg)等(図2)が出土したのである⁶⁾。この九輪出土によって筆者の15年前の想定が決して荒唐無稽ではなかったことを理解していただけるであろう。しかし、ここでは紙数制限の関係で〔第2部〕の結論だけを(上)として記すに留めなければならない。九輪の発掘による新たな知見は上記報告書⁷⁾と併読していただければ幸いである。

2. 文献から見た北山大塔焼亡

まずは北山大塔焼亡に関して符合する二つの記事から探っていきたい。

「九日。雨降。戌剋雷電暴風以外也。此時分赤氣輝蒼天。若焼亡歟之由不審之處。北山大塔七重。為雷火炎上云々。雷三度落懸。僧俗番匠等捨身雖打消。遂以焼失。併天魔所為勿論也。去応永七年相國寺大塔七重。為雷火炎上。其後北山ニ被遷之。造営未終功之處又焼失。末代不相応歟。法滅之至可歎。應又。相國寺ニ被遷可被建立之由則有其沙汰云々。」(『看聞日記』⁸⁾ 応永廿三年正月九日)

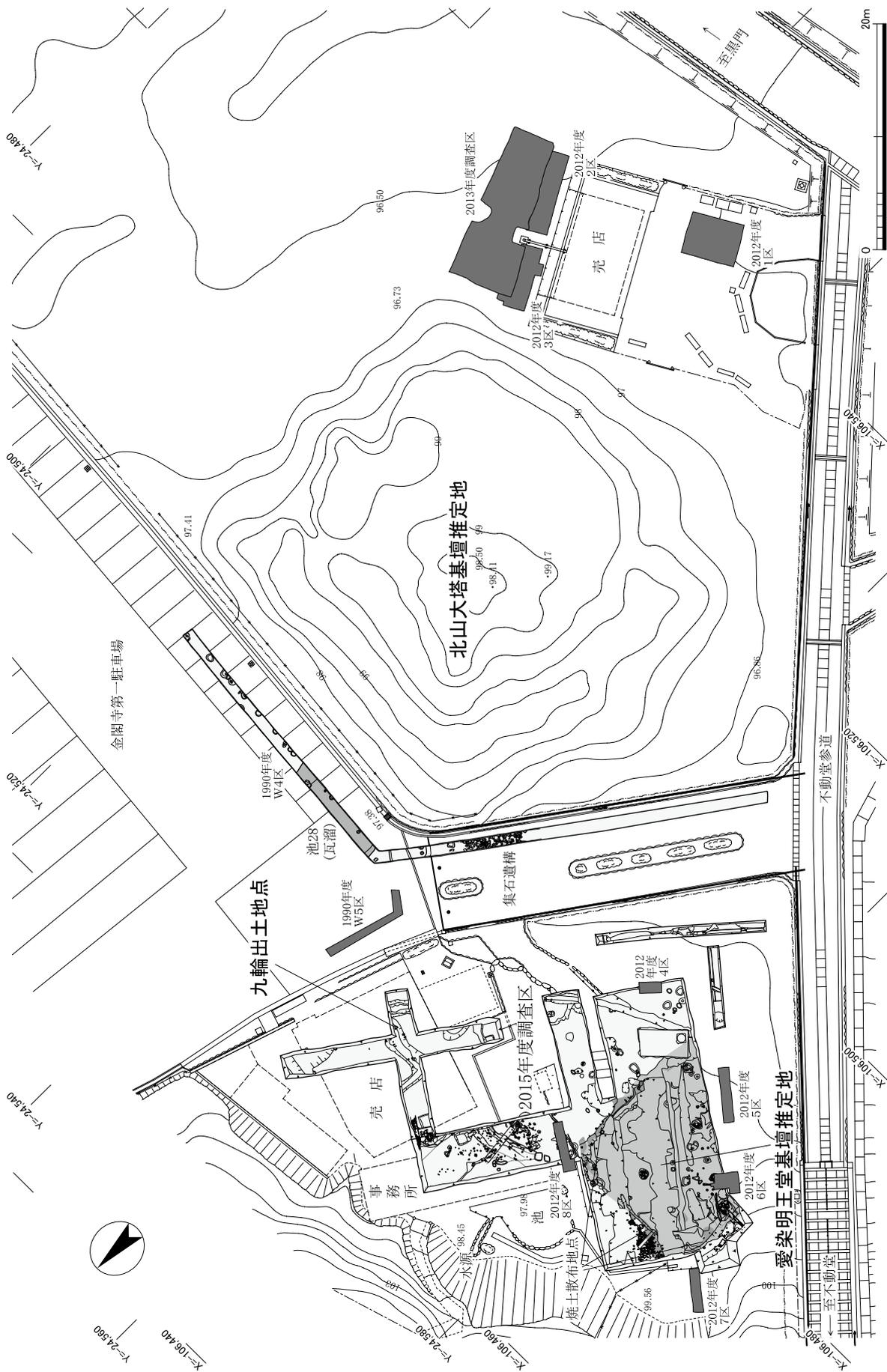


図1 金閣寺境内北東部調査区配置図 (1 : 500)

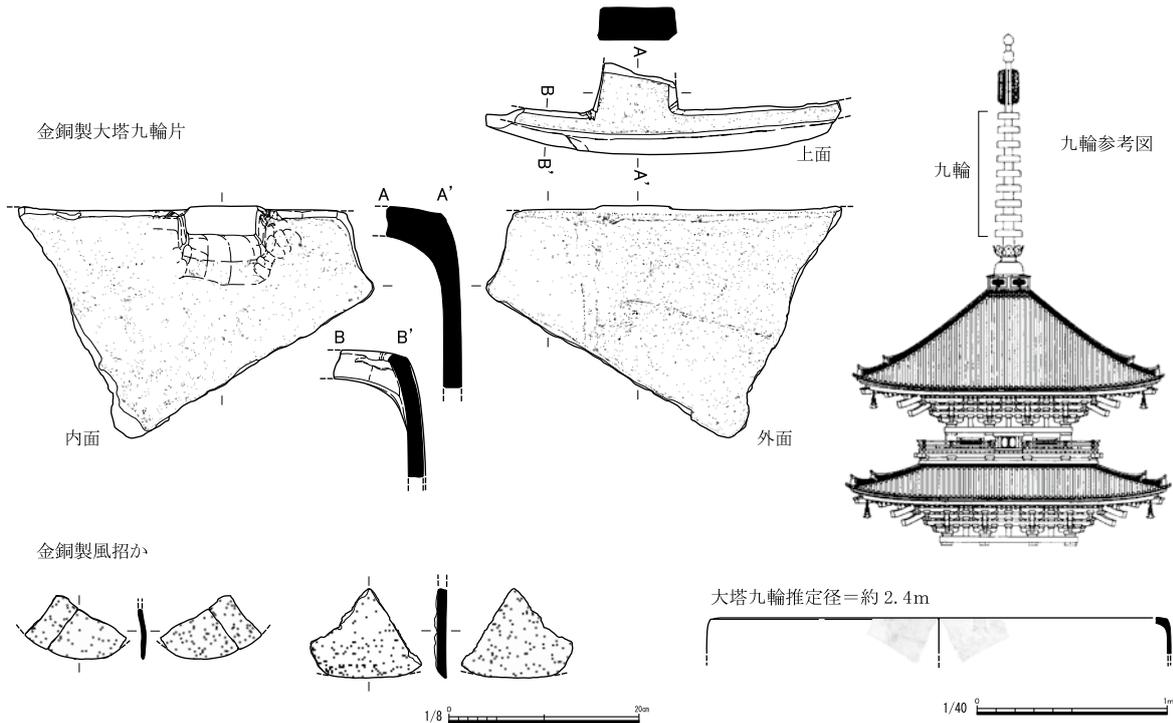


図2 大塔金銅製品

「九日、陰定遍満、戊初刻雷電、驚聽、遂而北山大塔上雷落、懸火出來塔婆、片時其残焼失、塔本邊不斷言广愛染王堂焼失、本尊奉出也、塔本之木屋已下悉無残、但北山御所無爲、此大塔御建立已及十四カ年、去年大略九輪等上之、當年可周備之處、凡無念、無力事歟、」(『醍醐寺文書・二百一函』⁹⁾)

つまり、応永二十三年(1416)正月九日、北山大塔は落雷により大略九輪等上げて周備していたにもかかわらず片時其残焼失してしまったのである。また、「塔本邊不斷護摩愛染王堂焼失」とあるように、大塔に隣接して、ともに焼失した西園寺時代から存続していた「愛染王堂」の可能性が高い正方位の基壇を、大塔推定地の西側の調査で検出した。被熱のために赤く変色した火災痕を残す地山を削り出した基壇跡(図1)がそれに比定できるならば、近隣して焼亡した大塔位置の蓋然性は更に高まるであろう。以下に述べるように、北山大塔は、日本国王足利義満をして「此大塔御建立已及十四カ年」も費やして「當年可周備之處」が、遂に完成できなかった『室町の王権』¹¹⁾の院政的シンボルであり、未完のモニュメントだったのである。

ところが不思議なことに相国寺七重大塔に比べて北山大塔に関する研究は今日まで未開拓な忘却の彼方に追いやられている幻の塔と化しているのである。この再建された北山大塔については、頼るべき研究が少なく、未だ専論はない。伝記を別にして赤松俊秀氏が寺史で「¹²⁾ 応永十年(1403)六月三日に焼失した相国寺大塔を北山殿で再建しようとして、翌十一年(1404)四月三日に立柱の式を行った。翌十二年(1405)六月六日には心柱を引くようになったが(『教言卿記』応永、十二、六、六)、大工事の故か、はかばかしく進捗せず、立柱から四年後の応永十五年(1408)年二月十二日に、東寺へ塔に安置する本尊を調べに行くまでに漸く進捗した。こうして出来上がった七重大塔も、応永二十三年(1416)正月九日に焼失した(『看聞日記』応永廿三、正、九。)」という要約

や、早島大祐氏が大塔の造営過程を明との交易による財政的な面から論じておられるにすぎないのである。¹³⁾

問題の北山大塔所在地に関しては、近年、細川武稔氏が、金閣寺境内とする筆者の見解に対して「鹿苑寺の外側ということになる」とされている。¹⁴⁾しかし、細川氏の作成された「北山新都心図」を参考にして京都府立総合資料館蔵1/1200明治17～32年『官有地籍図』と後に述べる鹿苑寺作成の『鹿苑寺（金閣寺）現況平面図』を当て嵌めて北山大塔推定地の位置を記入した新たな北山新都心図案が図3である。両側町を形成する字八町柳を挟む道祖大路末延長線上の中軸に北山北御所が位置し、この中軸から金閣寺境内西の金閣に対し東側の左右対称位置に大塔基壇が位置することが見て取れよう。また金閣寺境内東側の突出した特別な区画部分に位置することも北山殿建物配置を考えるために重要である。そこは金閣寺境内でも京都市内を最もよく眺望できる不動山裾野南に位置しているのである。不動山は鎌倉時代京都で最も権勢を保った西園寺家の墓所である。西園寺を建立した西園寺公経が夢みた『源氏物語』「若紫」の中で光源氏が「後ろの山に立ち出でて、京の方を見たまふ」という場面を彷彿とさせる絶景地で、山の南西中腹には光源氏が向かった「北山になむ、なにがし寺」について描かれた「峰高く、深き岩のうちにぞ、聖入りみたりける。」を彷彿させる石窟でつくられた「石不動堂」が現存する。その奥にある不動山岩壁に光源氏が北山の風情を「夢さめて涙もよほす滝の音かな」と詠んだ和歌に擬えて造営された「四十五尺瀧」が存在したと筆者が推定した。それが〔第1部〕の内容である。

相国寺七重大塔に関しては早くも明治時代中葉に東京帝国大学史料編纂室の田中義成氏が「茲に注意すべきは、相国寺の塔の第一基（層）には、金剛界の大日如来を安置し、第二層には胎藏界の大日如来を安置せる事なり。これ不思議の事なり。何となれば、相国寺は禅宗なるに、其寺内に塔を立て、真言の仏像を安置するは異例なり。蓋し禅宗は武家の宗教にして、真言は皇室の仏教なり。故に義満は公家と武家との宗教を合同する意味に於いて此塔を造りしならん」と問題を提起されて以来、その塔の性格を巡って様々な議論が繰り返されてきた。そして、奇しくも〔第1部〕と同年に建築史学の富島義幸氏が発表された論考『相国寺七重塔』の中で「義満は相国寺七重塔供養において、南都北嶺の顕密権門諸寺の僧侶、関白以下の廷臣を参列させ、顕密仏教と公家からなる空間、すなわち天皇・院の存在しない『擬御願寺供養会』の空間をつくりだした。そして義満自らが證誠となることで、その頂点たる自らの地位を示した。この七重塔は、あくまでも顕密仏教の塔として建立・供養されたのである」と見事に総括されたのである。¹⁵⁾にもかかわらず北山大塔に関しての議論は皆無に等しいのである。今日までの金閣寺に関する多くの論説も北山七重大塔に関しての記述を省くか、もしくはあるとしても、嘗て北山に七重大塔が存在したとの付け足りで済まされている。これでは、大塔の存在自体が疑われると言っても過言ではないであろう。その理由の一つとして確実にいえることは所在地を示す塔跡や遺物が未だに不明だからである。

3. 金閣寺境内東北部地図等高線上に現れた巨大な正方形の高まり

ところで2001年度に実施した第8次金閣寺境内発掘調査において、筆者は鹿苑寺から頂いた50

cm単位の等高線入り 1/200『鹿苑寺（金閣寺）現況平面図』（昭和63年実測・平成元年作図）を使用した。大型地図ではスケールが大きすぎるので1/500に縮小してみると、各地域ごとの大まかな特徴が窺えた。ここで再び図1を参照してほしい。これは金閣寺境内北東隅駐車場付近の部分地図である。この地図の駐車場南近辺を一見すると、駐車場南沿から売店間に、一辺約40m四方、高さ約2.5m、上面はほぼ平らであるが、中央部に幅約5m、深さ約1mの不定形な凹みのある正方形の高まりが、等高線から見事に浮かび上がってくる。

今一度この方形高まりの位置を記しておく、金閣寺正面参道入ってすぐ右手の北20m、石不動堂参拝道石階段下手前の金閣寺駐車場南側に、鬱蒼とした巨木に覆われた巨大な正方位の高まりがそれである。この高まりは近年木々が切られ一部変造されてしまっているが、金閣寺境内の境界線をなす南北道路である鏡石道から西40m・石不動堂から東南50m地点に今なお厳存している。また、この高まりは、北西で今回検出した正方位の「愛染明王堂」基壇跡と考える高まりと同じ方位である。

相国寺七重大塔に関しては『相国寺塔供養記』¹⁷⁾に「この御塔こそ経文にもかなひて、さるハたかさも法勝寺の塔にハマさりたりとそうけ給はる」と述べられており、『翰林葫蘆集』¹⁸⁾には「於相慶賛七重大塔、其高三百六十尺」とあるので、法勝寺九重大塔より高い日本一の109mとなる。また、この塔が法華経の経文にかなった顕密の塔である事も判明する。相国寺塔を北山で再建しようとしたのであるから、基底部一辺40m・高さ2.5mの基壇はその高さに相応しい。『鹿苑寺（金閣寺）現況平面図』を隈無く探しても金閣寺境内に基壇状の高まりはここ以外に皆無なのである。

筆者はこれを文献に表れた北山七重大塔の基壇跡だと考える。しかし、残念なことに鹿苑寺にこの高まりに対する特称は存在しない。つまり、今日では誰も注目しない単なる高まりと化しているのである。ところが塔跡は削平されない限り基壇跡として何らかの痕跡を留めているはずである。

4. 金閣寺境内W4区で検出した集石遺構と大量の大型瓦群

この正方形の高まりを大塔基壇跡とする想定を支持するものに、現金閣寺駐車場南側一帯で実施された調査成果がある。その調査のW4区西半北部で時期不明の「集石遺構」を検出した（図1）。しかしながら、幅1メートルで深さも浅い埋設管工事前調査のため「集石遺構」はそのまま埋め戻し保存となり、その性格については不明とする外なかった。

また、W4区が折れ曲がる北西角で検出した「池28」があり、コンテナ30箱分の義満時代の大型平瓦・丸瓦が大量に捨てられた状態で出土しており、瓦溜の様相を呈していた（総破片数約1000点）。しかも軒瓦の出土は極端に少なく軒平瓦（復元幅約30cm）・軒丸瓦（復元幅約15cm）各1点に留まる。我々はこれらを一括遺物として統計的に取り扱うことが出来る。つまり「池28」出土瓦が大型であり、しかも、わずか2点の軒瓦と膨大な量の平・丸瓦出土比率から、今日までの調査で本瓦葺建物に使用された瓦と考えられるのは、W4区北西角「池28」から出土した大型瓦群だけであり、崩れ落ちた瓦をまとめて捨てたものとする。

『相国寺塔供養記』に「門の内にいりて見れば、七重のいらかかさなりて、四面のとびら、たる

きの彩色、夜めにもかゞやくばかりなり」とあり、相国寺塔が瓦葺きであったことがわかる。檜皮葺が多い北山殿院御所の中で室町時代の大型本瓦葺きの建物は消去法によって大塔に使用されていた瓦である可能性が高いのである。

筆者はこの瓦群について前記報告書²⁰⁾や『研究紀要』²¹⁾において「義満ゆかりの相国寺・臨川寺等の禅宗寺院や鶴岡八幡宮等・・・でも出土し、足利幕府・義満の権威を示す瓦²²⁾」であることを論じておいた。足利氏の故郷で室町幕府直轄地であった下野足利・樺崎寺（法界寺）からも出土しており、その後、山崎信二氏が詳細に集成されたこと²⁴⁾によって出土瓦の年代観は、ほぼ確定されたと思う。また、その瓦の整理過程で筆者が述べた中世の平瓦製作技法である「平瓦積み重ね技法」が、『発掘調査のてびき・各種遺跡調査編』で採用され、現在では中世に「平瓦の凹凸両面で離れ砂が見られることから、一枚作りに代わり、数枚を積み重ねて成形する積み重ね技法が成立したと考えられている²⁵⁾」とされた。

さて、この「集石遺構」と「池28」とを検出した発掘調査W4区トレンチ平面図を金閣寺境内図にトレースしてみると、検出した「集石遺構」が、正方形の高まりの北西隅部に微かに重なることが判明してきた。図1で「集石遺構」が正方形の高まりの隅部に一部重なっていることが理解できよう。もしそれが基壇に関係していたとすれば、我々は既に基壇の一部を発掘をしていたことになり、地業の可能性もある。いずれにせよ正方形の高まりが、明治以前からの人工の構築物であることが判明する。

北山大塔の前身塔である相国寺大塔の場合、四方に石階を配した基壇であることが『相国寺塔供養記』に触れられている。すなわち式の始まりに於いて「次関白以下、次第に座をたちて、東の石階をのぼりて、御塔の壇上に着給ふ。正面の階のまの東より、北のかたへおれて着座あり。立塔（異本に「土壇」とするものあり）の上にひろむしろを敷みて、そのうへに両面のみどりべり、黄べりなどの畳をしく²⁶⁾」とあり、このことから相国寺七重大塔の場合は亀腹に木製の縁ではない「石階」で「土壇」に登る形式である事が判明する。北山大塔も相国寺大塔基壇を踏襲した可能性は高いと考える。

5. 墳墓の可能性について

ところが図1を一瞥しても解るように外見上は方墳のように見える。中央部にある大きな窪みも古墳の天井が陥没した跡と考えることができる。形態が方墳とアナロジーだからである。だが、窪み内から石材は見えず、近辺から古墳時代の遺物は一点も検出していない。この点に関しては前記の断割調査²⁷⁾で上部平坦面に厚い被熱層を検出しているの、何らかの建物の基壇であることがはっきりしている。

しかし、これには怪しい話が鹿苑寺に残っている。この正方形の高まりに目をつけた先駆者が既にいたのである。寺の話によれば「明治時代に某考古学者が、この方形の高まりを発掘したにもかかわらず何も出土しなかった」という。図1中央部の巨大な凹みがそれである。しかも、記録は何も残されておらず、誰が何を目的に発掘したのかも今では定かではないが、いずれにせよ何も出土

しなかった発掘済みの場所としてとして寺側では今日まで処理されてきたのである。しかし、何も出なかったという事は、そのことだけでも議論にとって本質的で重要な手懸かりを我々に与えてくれる。というのも、それが墳墓ではなく、また、心礎が地下に掘り込まれた塔の形式ではないという、逆説的な意味での大塔存在の証明になるからである。なぜなら下で述べるように「石引」や「立柱の儀」は行っても心礎を引いた記事がないことや、「石引」「立柱の儀」から1年後に「真柱」を引いた記事が存在することから、以下に述べるように、真柱は2階止まりで、一階中央内陣に本尊金剛界大日如来が鎮座し、中央地下に心礎を掘り込まない「大塔形式」である可能性も考えられるからである。

6. 相国寺七重大塔と北山大塔

北山大塔の前身塔である相国寺七重大塔の結構については、幸いなことに落慶供養があった応永六年九月十五日の『供養相国寺塔願文并咒願文』²⁸⁾によって大まかな概要を知ることが出来る。

「建立七重塔婆一基、奉造立安置金剛界大日如来、阿閼、宝相、弥陀、不空等五仏像、并第二層胎藏界大日如来像、奉綵画内陣四柱三十二尊、并扉面二十四天像」

これは、とてつもない密教的「七重塔婆」である。なぜなら、初層に「金剛界大日如来、阿閼、宝相、弥陀、不空等五仏像」を安置するだけでなく、二階にも「胎藏界大日如来像」を安置し、しかも扉には通例十二天像（帝釈天・火天・閻魔天・羅刹天・水天・風天・毘沙門天・伊舎那天・梵天・地天・日天・月天）の倍の「扉面二十四天像」を描くから、二枚一組の扉が十二組で合計十二間分の扉を有し、通例の塔が三間四方・中央一間各二枚扉であるのに対し、今日残存する大塔形式の塔がそうであるように四面中央の各三間に合計二十四扉が四方に開いていたことが、この『願文』によって理解できるからである。いずれにせよ、四面とも扉だけで構成されていたことは到底考えられないので、初層は工法上からも各面両脇一間は窓ないし壁で、更に庇に裳層付の少なくとも方五間か七間の大塔であったことが理解できよう。しかも参加者全員が塔の周りを廻る「大行道」の際「此間空より花をふらす、是は御塔のこしことに僧十人つゝのほらせて葩をちらされける也、泉涌寺、法勝寺、安楽光院、太子堂、元応寺、此五ヶ寺の律僧達とそ聞えし」（『相国寺塔供養記』）とあるように七階まで登れて眺望できる大塔であった可能性が高い。

この相国寺七重大塔落慶供養の有様については、眺望できた塔という観点から既に石田尚豊氏が『供養相国寺塔願文并咒願文』と『相国寺塔供養記』²⁹⁾の記事から次のように見事に纏められた。

「そもそも相国寺塔落慶供養は、自家の仏事供養でありながら、その儀式は国家の重要仏事である御齋会に準ずるといふ宣下を受け、その證誠座は、本来御願寺供養の際、法親王しか座せないものでありながら、義満みずからが座すなど（『相国寺塔供養記』）御塔供養にかける執念はすさまじいものがある。しかも塔は禅宗の相国寺の大塔でありながら、初層には金剛界五仏、第二層には胎藏界大日如来像を安置し、金胎両部を具えた密教の大塔であり（『本朝文集』七十二）、供養導師は天台の青蓮院一品親王尊道、呪願導師は仁和寺二品親王永助であり、参列を要請した僧も延暦寺・東寺・園城寺の天台真言の密教僧に、奈良の東大寺、興福寺の顕教僧で占められており、（『相国寺

塔供養記』) 相国寺塔の建立が、禅宗以外の密教、顕教勢力への、義満なりの配慮に基づくものであることを明瞭に示すとともに、その後青蓮院門跡に、尊道を経て義円(後、將軍義教)、仁和寺永助親王の跡に法尊と、法親王のみが継承しうる門跡寺院に、あえて義満の二子を相次いで入寺させていることなど、相国寺大塔建立の陰には、公武合一顕密禅融合の伏線が張られていたのである。」

だがしかし、北山七重大塔に目を転ずれば田中義成氏が「故に義満は公家と武家との宗教を合同する意味に於いて此塔を造りしならん³⁰⁾」とするならば、なぜ、あえて禅宗寺院ではない北山御所に變更して再建したのだろうか、という疑問も湧く。この問題に関しては後に筆者なりの回答を果たしたいと思う。とはいえ「相国寺は禅宗なるに、其寺内に塔を立て、真言の仏像を安置するは異例」であるとすれば、確かに田中氏が思われた様に「これ不思議の事なり」であり、結果からすればそこには明らかな捻れ現象が生じている。しかし、義満の將軍時代と院政時代とに分けて考えれば寧ろ当然の成り行きであると考えられることもできる。なぜなら義満が相国寺で塔を建立しようとした段階では、彼はまだ將軍であり、父の三十三回忌のために相国寺塔を建立することは幕府官寺としても相応しかった。そしてその段階では「故に義満は公家と武家との宗教を合同する意味に於いて此塔を造りしならん」という田中氏の結論もそう間違っているようには思えない。ところが、彼が院政を行うため北山御所に移り住んだ頃からは話は別で、相国寺七重大塔の完成を祝う落慶供養が執り行われる段階では、廷臣を代表すべき関白一條教嗣が「一天のあるし、萬民のヲやたる御事」(『相国寺塔供養記』)として述べたのも決して誇張でも揶揄追随でもない現実と化していたのである。国家の親たる法皇として君臨する以上、富島氏が述べられたようにたとえ建立場所が相国寺内「別郭」であろうとも、国家的レベルにおける一大イベントとなれば仏教統合者としての立場

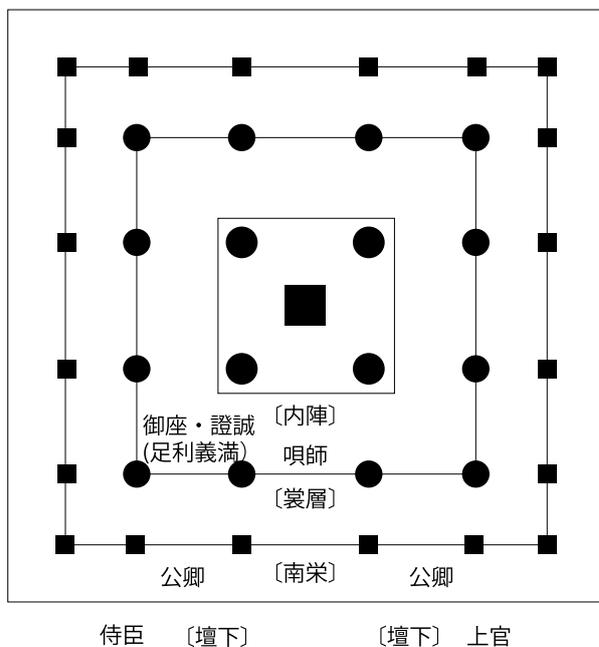


図4 応永6年(1399)相国寺七重塔供養会の空間構成概念図
富島義幸「相国寺七重塔」『日本宗教文化史研究』第5巻第1号
日本宗教文化史学会 2001年より転載

からも政治力学上からも鎮護国家のための顕密による塔供養でなければならなかった筈である。相国寺塔落慶供養は「千僧供養」であり、山門四百僧・興福寺三百僧、寺門・東大寺・東寺それぞれ百僧が参集したが、禅宗僧は誰一人数えられていない。しかし、ここで見なければならぬのは、この供養会は石田氏が述べられた「公武合一顕密禅融合の伏線が張られていた」だけではない。問題は逆である。それには大きな欠陥を孕んだものであったのである。

この点について富島氏は前掲書で本質的な問題を提起されている。即ち、院政以降の御願寺供養会における人的構

成と空間を歴史的に比較検討された上で「相国寺七重塔供養における人的構成は、供養会に参仕した僧侶、参列した関白以下の貴族とも基本的に院政期の御願寺の建築供養会と同じであったことがわかる。すなわち相国寺七重塔の供養会は、天皇・院の行幸がなかったことをのぞけば、准御齊会とされたことはもとより、その安置仏・人的構成・空間構成までもが御願寺供養会に擬えたものであった。この供養会が院政期の御願寺供養会とことなるのは、證誠を願主である義満自ら勤めたこと、天皇・院の行幸がなかったこと、という二点である。」³¹⁾と指摘された。このことは富島氏が図示された図4を見れば一目瞭然で「相国寺七重塔供養会では、院政期御願寺の供養会にもとづきながらも、そこには天皇・院が存在せず、ほんらい天皇・院が着座すべき裳層は空白となったのである。」³²⁾この「裳層」についての指摘は本論にとって決定的である。来たるべき北山の七重大塔供養会では、相国寺七重大塔供養会で空白であった図4の「裳層」の間に誰が着座したのであろうか。

7. 北山大塔建立から見た義満の皇位篡奪問題

紙数が尽きたので結論だけ述べる。北山大塔は義満の分身であり、彼の目的が何処にあったのかを端的に暗示している。「一天のあるし、萬民のヲや」である法皇義満と義父・猶子の成立を示す応永十五年（1408）三月八日から20日間にも及ぶ異例な朝覲行幸である北山行幸を果たし、既に義満の妻北山院日野康子を国母（准母）とし、幼少の時から義満に扶持されてきた後小松天皇である。この点に関して異論はなかろう。³³⁾もし仮に北山大塔供養が行われていれば、義満の最大の盛儀とされてはいるが、天皇の参加がなかった相国寺七重大塔供養会で空白の「裳層」の間に、それを上回る盛儀となるはずであった北山大塔供養会では、御願寺供養会の常として後小松天皇の御座（御所）が「裳層」に設けられたはずである（図4参照）。そしてまた義満の子で後小松天皇の北山行幸から義満が亡くなる直前までに急激且つ確実に階位が上がり、義満が亡くなるほぼ一週間前の応永十五年四月二十五日には内裏に参内して親王の元服の儀である白昼の儀までを行った親王待遇の義嗣が、後小松天皇の猶子として皇太子の座である「裳層」に並んで着座したはずである。恐らく京中と供養会の警備は將軍義持を筆頭とする武家が担い、北山殿内には千僧供養に出向いた頭密僧を中心とした僧侶で満ち溢れ、大塔の基壇上軒下（栄の間）には公卿全員が着座し、基壇下には上官・侍臣等百官が取り囲んで着座したはずである。筆者はこれを大塔中心内陣（廂）に一人義満が着座する院を頂点とする「寺社権門体制」の完成形とみる。所謂「皇位篡奪計画」なるものは、守護大名勢力に掘り崩されつつあった「寺社権門体制」を保守的に維持する必然的な形態だったのではないか。武家の禅宗寺院で行われた中途半端な相国寺七重大塔供養段階との時代差がある。

昨今流行の「皇位篡奪計画」論を個々の事象だけを取り上げて否定する議論（例えば「皇統は天皇の血から発生するものであって、上皇の号から発生するものではない」とか「義満は天皇家に次ぐ家格を目指していた」等の通説）は歴史の流れにおいてみない個別的で静的な結果論に過ぎない。今日までの「皇位篡奪計画」論に欠けていた弱みは、専ら義満の意思問題に矮小化しており、もし仮に北山大塔供養会が実施されていれば皇位がどうなっていたかの必然性にまで考察が及ばなかった点にある。既に小島毅氏が述べられているように義満の内裏への参内は「応永十四年が一

年を通じて十五回なのに対して、彼が亡くなる「応永十五年は四ヶ月ですすでに十四回に達している³⁴⁾」のは何故なのか。すべての行動計画は完成間近の北山大塔供養会に照準を合わせていたからである³⁵⁾。

北山大塔建立過程で見なければならない点は、「一國大儀候」や「天下之御大事、諸國平均之煩候、無力次第歟」とされた天下普請の先駆ともいえる相国寺大塔建立過程でさえ権門勢力と守護勢力とは持ちつ持たれつの矛盾を内包しており、それが義満亡き後は寺社権門を代表する黒衣の宰相三寶院満濟のもとでの守護合議体制で余命を保っていたが、その後は周知のごとく権門体制の内実が武家による領地の蚕食と土一揆対策に追われ戦国時代に突入したという点にある。また、義満亡き後の義持時代にも北山大塔は焼亡まで細々と造営を継続していた。この点は（下）で述べるが、北山大塔焼亡後は『看聞日記』が伝えているとおり「相國寺ニ被遷可被建立之由則有其沙汰云々」となり、寺社権門体制の統合シンボルとして文明二年（1470）の焼亡まで相国寺の東側に再建相国寺大塔が存続したのである。

最後に今回の九輪発見によって早島大祐氏が「大塔は幻というヴェールから解き放たれ、室町時代研究はここに、また一步、歩みを進めたわけである。」と述べられたこと³⁶⁾に注意を促したい。

追記 本稿は黒田俊雄氏の所謂「顕密・寺社権門体制論」をベースに義満個人の奇矯な振る舞いとして捉えられてきた所謂「皇位篡奪計画」を、その没落過程を発掘調査で明らかになった義満の院政シンボルとしての巨大な北山七重大塔の建立過程を通じて歴史的必然性として論じることにあつた。顕密勢力の頂点に立つ比叡山の法華経の「経文にもかな」う北山大塔建立過程と焼亡が権門体制の完成とその没落が、造営を実質的に担って台頭する守護領国権力への権力の移行過程を如実に象徴していると考えたからである。しかし、文献に残る逃散一揆まで発展した百姓はもとより、守護大名から寺院勢力にまで過大な負担を惹起した北山大塔造営過程や黒田氏の「権門体制論」、皇位篡奪計画を綿密に追われた今谷明氏の核心部分の分析と守護不入の権を得ていた南都の「北山大塔大工」・瓦師・仏師等を総動員した問題については紙数制限のため割愛して下に回すこととなった。

註

- 1) 東 洋一「西園寺四十五尺瀑布瀧と北山七重大塔（上）－金閣寺境内における所在について－」『研究紀要』第7号（財）京都市埋蔵文化財研究所 2001年
- 2) 『特別史跡・特別名勝鹿苑寺（金閣寺）庭園』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016-13（公財）京都市埋蔵文化財研究所、として2017年3月末発刊予定。筆者が当論考執筆中には未刊。
- 3) 鈴木久男「不動堂石室の文字」『鹿苑寺と西園寺』臨川書店 2004年
- 4) 有馬頼底『Z E A M I・足利義満の時代』森話社 2007年、p 21
- 5) 三枝暁子「日本国王へ道」『京都の歴史を歩く』岩波書店 2016年、早島大祐『足利義満と京都』吉川弘文館 2016年
- 6) 『特別史跡・特別名勝鹿苑寺（金閣寺）庭園』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2015-9（公財）京都市埋蔵文化財研究所 2016年

- 7) 前掲註6 報告書の筆者担当部分。
- 8) 東京大学史料編纂所『大日本史料』のデータベース (wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/db.html) による。該当条を参照。
- 9) 前掲註8に同じ。
- 10) 前掲註6 参照。
- 11) 今谷明『室町の王権』中央公論社 1990年
- 12) 赤松俊秀「寺史」『鹿苑』鹿苑寺 1955年、p 26
- 13) 早島大祐『室町幕府論』講談社 2010年
- 14) 細川武稔氏「『北山新都心』に関するノート」『中世政治社会論叢：村井章介先生退職記念』東京大学日本史学研究室紀要別冊 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部日本史学研究室 2013年、p 163
- 15) 田中義成『足利時代史』講談社 1979年、p 49
- 16) 富島義幸「相国寺七重塔」『日本宗教文化史研究』第5巻第1号 日本宗教文化史学会 2001年、p 60
- 17) 前掲註8に同じ。
- 18) 前掲註8に同じ。
- 19) 『特別史跡特別名勝鹿苑寺（金閣寺）庭園 防災防犯施設工事に伴う発掘調査』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第15冊 鹿苑寺 1997年
- 20) 前掲註19報告書の東 洋一「第4章2 北山殿創建平瓦・軒平瓦の製作技法」
- 21) 東 洋一「平瓦制作における中世の技術革新について 第一部—金閣寺出土瓦を中心に—」『研究紀要』第1号（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995年、東 洋一「平瓦制作における中世の技術革新について 第2部 中世棟平瓦製作技法の復元」『研究紀要』第3号（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 22) 前掲註21の1996年文献、130頁
- 23) 『よみがえる中世寺院・樺崎寺跡の発掘調査』足利市教育委員会 1997年
- 24) 山崎信二『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所 2000年
- 25) 文化庁文化財記念物課編『発掘調査のてびき・各種遺跡調査編』同成社 2013年、p 125
- 26) 前掲註8に同じ。
- 27) 前掲註2に同じ。
- 28) 前掲註8に同じ。
- 29) 石田尚豊「洛中洛外図屏風の概観・町田家旧蔵本を中心として」『洛中洛外図大観』小学館 1987年、p 95
- 30) 前掲註15
- 31) 前掲註16、p 58
- 32) 前掲註31に同じ。
- 33) 義満が生前「上皇」の「尊号」を朝廷に求めていたことは小川剛生『足利義満』中央公論社 2012年参照。また、義嗣元服が通説となっていた撰関家ではなく親王に准じていたことは森幸夫「足利義嗣の元服に関する一史料」『古文書研究』第77号 日本古文書学会 2014年で明らかにされた。また、皇位篡奪否定論の先鋒を担われた太田壮一郎氏の北山密教修法の性格が「国家的祈祷」ではないとす

る議論に関しては、湯谷祐三氏の「自他共に自身を法皇に擬しており、実際にはそれ以上の権力を掌握している義満が北山殿で行う密教修法の目的について、それを「個人的護持」と「国家的祈祷」とに二分して考察しようとする方法自体に、少なくとも義満自身の意図を考えるとという意味では、いささか無理があるように見受けられる。」（「金閣寺は、金閣寺として建てられた」『名古屋外国語大学外国語学部紀要』42号 2013年、p 306）とする批判が妥当であろう。湯谷氏の論考の存在については東京大学准教授三枝暁子氏に御教授を受けた。

- 34) 小島毅『足利義満・消された日本国王』光文社 2008年、p 213
- 35) 国文学の立場から所謂「源氏物語准拠説」によって義満の皇位篡奪計画を肯定され、北山大塔完成を射程に入れた唯一の議論を展開された三田村雅子氏は『記憶の中の源氏物語』（新潮社 2008年、p 152）のなかで『源氏物語』の北山を金閣寺周辺とした上で西園寺時代から義満時代にかけて「北山は代々の天皇の行幸の地であり、仏教の霊地であり、光源氏も国見した眺望と、音楽の聖地であることを兼ね備えた源氏物語のテーマパークであり、その土地の（記憶）を手がかりに源氏物語の世界を現出させる舞台装置でもあった」とする説に全面的に賛同する。但し、後小松天皇の「北山行幸は北山大塔完成を一つの区切りとして、十年の歳月の末に姿を現した豪壮華麗な北山庭園を披露するために行われたと考えていい」という説は受け入れられない。なぜなら北山大塔はまだ完成しておらず、北山行幸は来たるべき篡奪計画が実現する北山大塔供養会の予行演習に過ぎないからである。だから三田村説では篡奪時の射程時間軸が前倒しにずれて窮屈なものになっている。しかし、来たるべき大塔供養会では三田村氏のテーマである王権を示す「青海波」が舞われ、義満・後小松・義嗣の笙の合奏奉納が実現したかもしれないのである。
- 36) 前掲註5の早島文献、p153